

モリソン文庫所蔵
“Aperçu de la grammaire siamoise” について

津 田 悠 一 朗

東洋文庫書報 第47号 抜刷

平成28年（2016）3月

モリソン文庫所蔵

“Aperçu de la grammaire siamoise” について

津田 悠一郎

モリソン文庫は、周知の通り、ジャーナリストの G. E. モリソンに由来し東洋文庫の核をなすコレクションである。筆者は東洋文庫においてモリソン文庫のデータベースを構築する作業に携わっており、そこに収蔵されている様々な書籍に触れてきた。そしてその過程で、数こそ多くないものの、筆者が関心を寄せるアジアの各言語に焦点を当てた文献にも出会うことができた。本稿では、そのうちの一つである Léon de Rosny 著の “Aperçu de la grammaire siamoise” (図 1) (東洋文庫での請求記号は P-XI-a-69; 以下、「本書」と表記する) を例に挙げ、アジアの言語に触れたフランス人がそれをどのように書き記したかを紹介したい。

1. 概要

本書は、1878年にパリで発行された *Revue Orientale et Américaine. Nouv. Ser. Tom. II.* に収録された記事の一つであり、“Aperçu de la grammaire siamoise” というタイトル(日本語に訳せば「シャム語文法概説」)が示す通り、タイ語の文法の概説である。

著者の Léon de Rosny (レオン・ド・ロニー、以下「ロニー」と表記する) は、ヨーロッパにおける日本研究の発展に尽力した先駆者として知られており、福沢諭吉などと交流があったこと

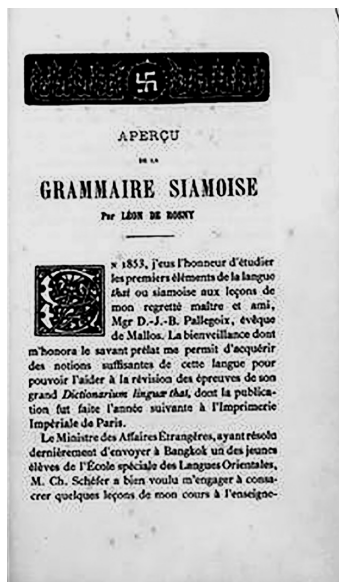


図 1 “Aperçu de la grammaire siamoise”の冒頭

でも有名である⁽¹⁾。その著書の多く⁽²⁾が日本または日本語に関連しているという事実からも明らかなように、日本を一番の研究対象としており、日本マニアとも言うべき人物であった。しかしそれだけではなく他のアジアの国々にも造詣があり、中国や朝鮮、および本稿で扱うタイなどに関しても、いくつかの文献を残している。

ただし、本書の対象とされているタイ語はあくまでロニーの専門外であったと考えられる。このことは、本書の冒頭で「1853年に Jean-Baptiste Pallegoix 猯下⁽³⁾の下でタイ語の初歩を学ぶ榮譽を得た」という趣旨のことが述べられていることから分かる（図1を参照）。よって、その内容はロニーが自ら調査や研究をして得たものであるというより、他の学者の研究成果に依拠したものであると見なすのが妥当である。また、一つの記事の中で多岐にわたる文法項目に触れているにも関わらず、分量としてはわずか10ページ余りという極めて簡潔なものとなっている⁽⁴⁾。

2. 前後の著作

ロニーがタイについて書いた文章は一つではなく、本書を執筆する前と後の時期にもそれぞれ著作が確認される。

まず彼は、1855年に“*Quelques observations sur la langue siamoise et sur son écriture*”（日本語に訳せば「シャム語とその文字に関するいくつかの考察」）と題した文章を発表している。これは本書の前身に相当する記事で、文の量・質ともに似通った部分がある。例えば、ロニーがアジア全般に興味を抱いていたこともあってか、タイ語に借用されている他のアジアの言語について、両者ともかなりの紙幅を割いて種々の単語を取り上げている⁽⁵⁾。とは言え、成立した年から察せられるように、こちらの方はロニーがタイ語を学んだ直後に出来上がったのに対し、本書“*Aperçu de la grammaire siamoise*”はそれからさらに20年以上経過した後に書かれている。したがって、後者は前者を発展させたものと言え、*Aperçu* の名にふさわしく、より広範にわたる文法の記述がなされている。

そして1885年には、*Le peuple siamois, ou thaï*（日本語に訳せば「シャム、もしくはタイの人々」）という本を書き上げている。これは本書とは打って変わって100ページ以上のボリュームがあり、言語的な観点からの考察はなく、タイの地理・民族・伝統・文化などをまとめた書物となっている。ロニーがタイという国に対して、言語だけにとどまらない関心を持っていたことが窺い知れる。

3. 本書の構成

本書の大まかな内容は次の通りである：始めに書記体系と音韻（各文字の発音）が第1節の“De l'Écriture thaï ou siamoise”（「タイ語もしくはシャム語の文字について」）で説明され、続く第2節の“De la Grammaire”（「文法について」）で文法を概観しており、各文法項目は名詞、形容詞、形容詞の比較級・最上級、数詞、代名詞…という順で並んでいる。こうした構成は現代でも馴染み深く⁽⁶⁾、概説書としては非常に理解しやすい形がとられている。

だからといって、本書を手放しに称賛するのは早計である。というのも、やはりその分量の短さゆえに、それぞれの項目についてかなり大まかな説明しかなされていないからである。形容詞を例にとってみても、その記述量は比較級・最上級を含めてやっと1ページ分といったところである。そのため、タイ語のことをもっと詳しく知りたければ、ロニーの師であった Jean-Baptiste Pallegoix の著作などを読むのがよい、とするほかになくなってしまふ。

4. まとめ

本書はタイ語についてごく簡単に記したガイドブックのようなものであり、19世紀の作品であるということも考慮しても、タイ語を専門的に学ぼうとする者にとっては物足りない内容であると言わざるを得ないだろう。しかしながらそのコンパクトさこそが、本書の大きな強みであるとも考えられる。タイ語という未知のアジアの言語は、当時のヨーロッ

パの人々にとって新鮮かつ魅力的に映ったであろうし、だからこそ、専門家でなくても手軽に読めるようなマニュアルが求められていたはずである。Jean-Baptiste Pallegoix の手による大作が学術語であるラテン語で綴られているのに対し、本書はフランス語で書かれているという点にも注目すべきである。多くの人に向けて書かれた文章がプロフェッショナルな学術書よりも価値が低いということは決してない。ロニーが日本のことを夢中になって研究する傍らでこうした専門外の事柄についても一定の記述を残したのは、大変意義深いことであったと筆者は考える。

注

- (1) 佐藤文樹「レオン・ド・ロニー：フランスにおける日本研究の先駆者」(『上智大学仏語・仏文学論集』7、1972年)を参照。
- (2) ロニーの主要な著作については、モリソン文庫所蔵の“Principales publications de M. Léon de Rosny”(*Revue Orientale et Américaine. Nouv. Ser. Tom. II. Paris, 1878.*)にも記載されている。
- (3) シャムの使徒座代理区長を務めた人物で、タイ語の本格的な文法書である *Grammatica Linguae Thai* や、大規模な辞書である *Dictionarium Linguae Thai* などを著した。
- (4) 本文の末尾に A suivre (「続く」という意味)と記されている通り、何回かに分けて書かれた連載であり、10数ページで完結しているわけではない。
- (5) 実例として、中国語の馬 (ma) に由来するタイ語の ม้า (ma) などが共通して挙げられている。
- (6) 例えば、現代の標準的な文法書と思われる David Smyth. *Thai: An Essential Grammar* (London: Routledge, 2002.)でも発音、書記体系、名詞、代名詞…という類似した順序で項目が並べられている。

本稿の執筆に当たって、筆者にお声をかけて下さった関係各位の皆様
に厚く御礼を申し上げます。

(東京大学大学院人文社会系研究科・博士課程)